
バカと奇跡の召喚獣

bigboos

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカと奇跡の召喚獣

【Nコード】

N8284Z

【作者名】

bigboos

【あらすじ】

両親が旅行に行っている中、悠太だけは親父の兄の家に向かっていた。

どうも、お久しぶりです初めての人は初めまして、今回二作品目ということで書きました。一作目もまだ書き中なのでそちらもどうぞ。バカテス×オリジナル小説を書きました、興味のある人は読んでください。（たまにゲストとして誰かが出てきます！
お楽しみに！）

第一問　もう一人の木下

ピンポン、俺はとある家のベルを鳴らした。

『はい、どちら様ですか？』

「えっと今日から居候させてもらうものですが・・・」

『あつ！ちよつと待っててね、お父さ〜ん来たわよ〜』

家の中からそんな声が聞こえた。するとドタドタと急いでるように階段を降りてきた。

『おお、よう来たな。さ、上がって』

「失礼します」

俺は今木下家にいる。なぜか、それは親父と母さんが旅行の券を取って、行くことにしたが流石に俺は学校があるので一人の残ることにした。

でも流石に高校生一人じゃあねと、母さんが言ったので何かないかと考えていると、親父のお兄さんの家がいいだろうと言いだし、早速電話して

聞いてみると、OKと言ってくれたのでお兄さんの家に住むことになった。

（ここに来るのも久しぶりだな・・・）

『久しぶりじゃのう、元気にしておったか？』

「はい、まあ元気になりました」

『秀吉と優子も待っておるぞ』

そうするとリビングから双子が来た。そうこの双子が秀吉と優子だ。どちらも瓜二つの顔をしていて、見分けがつかないほど似ている。

「久しぶりじゃのう、元気でおったか？」

今話しかけてきた方が秀吉だ。独特の喋り方をして肩にかかるほどのさらさらな髪をしている。

「久しぶりだね、元気だった？」

こっちが優子、秀吉とは違い喋り方はごく普通。髪は秀吉と同じだ。勉強ができる優等生だ。

「そうだね、久しぶり」

「相変わらず変わらんのう、眠たそうな喋り方は」

俺は昔から”眠たそうな喋り方だ”とよく親戚や家族から言われた。自分ではそんなに思っていないけど・・・

『秀吉や優子も知っているとおり、今日から悠太君はこの家で暮らすことになった
かろのう』

「宜しく願います」

『じゃあ秀吉、部屋を案内してやりなさい』

「うむ、了解じゃ」

そうすると俺と秀吉は荷物を持って二階に行った。

「ここがお主の部屋じゃ」

部屋の中は和風になっており、床は畳で窓は障子だった。

俺も和風は好きだけど、ここまでは……」どうじゃ？きに行ったかのう？」

「まあ、気に入ったけど……」

「ワシの部屋は隣じゃからな、何かあったらいつでもきくといいぞ」

「分かった」

そうすると秀吉は部屋から出て行った。

「とりあえず荷物を置くか……」

（二時間後）

「ぶつ、これでもいいだろつ」

水槽やいろんなものを置いた。外はすっかり夜になっていた。

『おい悠太よ、ご飯じゃぞ』

下から秀吉の声が聞こえた。

「うん、分かった」

ドタドタと階段を下りてリビングに向かった。

「おお、おいしそう・・・」

「ご飯は魚、肉じゃがなど色々あった。」

『じゃあ悠太君はここに座って』

「あ、はい」

すすめられた所に座った。その隣には優子が座っていた。

「眠たいの？」

いきなり何て事を聞いてくるんだ。眠たくはないって言うのに。

「いいや、別に・・・」

「なんでそんなに眠たい声で喋るの？」

そんな事俺がききたいわ。

そうしていると前に「ご飯が来た。」

『ちあ、どうぞ』

「」「いただきます」「」

ふうふう良く食べたな。あの後食べすぎて途中で食べるのをやめて、部屋に戻った。

(学校……どこに行くんだろうか……)

トントン、そんな事を考えているとドアを誰かがノックした。

「はい？どうぞ」

ドアをノックしたのは秀吉だった。

「どうしたの？秀吉？」

「いや、お主が行く学園のことじゃが……」

何やら不安そうに話しかけてくる秀吉。

「どうしたの？学園が？」

「その学園は振り分け試験というのがあってじゃな」

「うん」

「二年生になる前にその試験があるのじゃが」

「それで？」

「お主はできそうか？試験は？」

「試験か・・・まあまあ出来るけど」

「そうかそれなら安心じゃ」

秀吉が優しく微笑んで言った。俺が頭が悪そうだから聞いたのか？確かに俺はあんまり勉強はできないけど、一般的のやつは出来る程度の頭は持つてるんだぞ。

それから秀吉と話をした。

風呂に入って寝ようとした、思いながら。

（桜が満開かな・・・）

第二問 設定

名前：木下悠太きのしたゆうた

身長：169cm

体重：49kg

外見：顔と髪型は秀吉と優子に少し似ている。目は少し細い。

髪は結んでいない。秀吉や優子みたいに美少女ではないが
少しだけ美少女だ。

目の色は茶色

趣味：昼寝・剣道・ゲーム

秀吉と優子の父親の弟の息子。

中学二年生まで秀吉と優子のいる街で暮らしていたが、父親の転勤で引っ越した。

吉井明久や坂本雄二とは幼稚園からの親友。

あまり怒ることはないが、怒らせることをすると半殺しにしてしまう。

眠たそうな喋り方は父親ゆずり。たまに”くじゃ”と爺さん喋りになる、これは爺さんゆずり。

第二問 設定（後書き）

次回は2 - F に入ることになった悠太
そこには・・・！？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8284z/>

バカと奇跡の召喚獣

2011年12月28日08時50分発行